一月十四日（日）の四国新聞の一面「一日一言」を読んで

最初の部分を左に記す。

英和辞典で「ジャパン」を調べると、漆または漆器と記されている。16世紀後半、日本の漆器がヨーロッパへ伝わると、その深い色合いの「漆黒」に感嘆した。中国が「磁器（チャイナ）の国」であるように、日本は「漆の国」と呼ばれるようになった。１９３６年に完成した国会議事堂の内壁は、純国産の漆で塗られている。金沢生まれの漆芸家で人間国宝の松田権六（１８９６～１９８６）の強硬な主張が認められた。―以下略―

ジャパンは漆を、チャイナは磁器を意味するとは、何かで読んだ記憶があった。なかなか思い出せなかったが、晩ご飯を食べていて、ぱっと思い出した。そうだ、外山滋比古先生（一九二三年十一月三日～二〇二〇年七月三十日）のあの本だ。本の題名は分からない。本棚を探した。見つかった。「茶ばなし残香」（令和二年十二月十日第一刷発行、展望社）である。令和二年の年末に毎日新聞の紹介記事を見て手に入れて、令和三年のお正月に読んだのを思い出した。先生はこの本が発行される四ヶ月と十日前に亡くなっていたのだった。三一五頁の本、どこに載っているのか見当が立たない。なかなか面白かった記憶があり、最初から読み返すことにした。一七三頁にやっと出て来た。短い話なので、前半分程を左に記す。

うるし・まき絵

うるし・まき絵の万年筆をもらって、子どものように珍しがって、よろこんでいる。国産の高級品である。うるしだから国産にきまっている。うるしは、日本の代表的工芸品であり、欧米でジャパン（日本）といえば、「うるし」のことを意味するくらいだ。（ちなみにチャイナ（中国）といえば、陶器のことを意味する）

まき絵というのは、うるしの上にうるしで絵などをかき、金粉や銀粉で「まいた」ものである。

うるしはもともとアジア大陸独特の塗料であったが、聖徳太子のころ日本へ入ってきて発達した。千三百年前のことである。日本の高温多湿な気候が良質なうるしがとれるのに適しているといわれ、とくに日本海の沿岸ではよいうるしがとれた。代表は能登半島の輪島である。―以下略―

この話を読み終えて、英和辞典・中学校一年の三学期から使っている最新コンサイス英和辞典（一九五一年七月発行、三省堂）を引いたのを思い出した。

ジャパン、頭文字Jが大文字のジャパンは「日本」、小文字のそれは「漆、漆器」とあった。チャイナ、頭文字Cが大文字のチャイナは「中国」、小文字のそれは「磁器、陶磁器」とあった。八十歳にして初めてそのことを知り、年甲斐もなく興奮した記憶がある。

「茶ばなし残香」を夜遅くまでかかって一気に読み終えて、目を閉じれば、「日本の高温多湿な気候が良質のうるしがとれるのに適しているといわれ、・・・・・代表は能登半島の輪島である」の文章が脳裏に甦ってくる。何故だろう?今年は正に大波乱の幕開けだった。元旦に能登半島の大地震。一気に正月気分も吹っ飛んでしまったからか。

「日本は地震列島であることを一時も忘れちゃいけないよ」との私たち日本人への啓示なのか。

そんなことを思い煩(わずら)っていると、清少納言の「枕草子」、兼好法師の「徒然草」と並んで、日本三大随筆の一つと評されている鴨長明（一一五三～一二一六）の方丈記、「行く河の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず。澱みに浮かぶ泡沫(うたかた)は且つ消え且つ浮かび・・・」で始まるあの方丈記の中に、「六、大地震」があったなあと思い出したのだった。

六、大地震

並はずれた大地震で揺れることがあった。山は崩れて河川を埋め、海は傾いて陸地を浸した。都のあちらこちらの堂舎塔廟(どうしゃとうびょう)一つとして、元の形を保っているものはなかった。・・・・・その余震、通常であれば驚くほどの余震が、二・三十回揺れない日はなかった。―以下略―（現代語に直して記した）

鴨長明が存命時だから、平安時代末期から鎌倉時代初期の頃に、京都で大地震があっ

たということである。

つい一ヶ月余り前、昨年の大晦日の夜を思い出す。夜も更けてきた。テレビではＮＨＫの紅白歌合戦がかかっていたが、年のせいか観ているわけではない。何とはなしに、令和五年を振り返っていた。一、安倍派の政治資金パーティーを巡る問題（森友、加計、桜問題を忘れたのか）。二、自動車保険の不正請求、ビッグモーター。三、ジャニーズ事務所前社長の性加害問題。四、日大アメリカンフットボール部の薬物事件。五、ウクライナ・パレスチナの戦争。次々と思い浮かぶのは負のことばかりだった。能登半島大地震、もう一ヶ月が過ぎた。だが、いつになれば日常が戻るのか。誰にも答えられない。悲しい報道をテレビ、新聞で毎日見て、そして読んでいる。一方、二日の羽田空港の航空機衝突事故。日本航空の旅客機と、海上保安庁の航空機が衝突し、日航機が炎上した。日航機の乗客、乗員三七九人は全員脱出した。海保機の乗員六人のうち、機長を除く五人が死亡した。海保機は、能登半島地震の被災地向け物資を運搬のため新潟航空基地を目指していたという。

日航機がＣ滑走路に降り立ったのは二日午後五時四七分頃、着陸直後に煙が機内に入り熱さも感じたという。外部の炎上状況を確認して、前方二ヶ所、後方一ヶ所の非常口からシューターで脱出した。乗客の脱出が完了し、機長らが最後に滑走路に降り立ったのは、着陸から僅か十八分後の午後六時五分だった。それから約十分後に、機体は大

きな爆発音と共に激しい炎に包まれ炎上した。海外メディアからは「奇跡的だ」と称賛の声が上がった。機長をはじめとする全乗務員の責任感の強さと非常時の落ち着いた対応に感動して頭が下がった。日頃の訓練の賜物であろうことは言うまでもないが、日本人としての誇るべき資質をそこに見て心が洗われ涙を流したのだった。

今回の事故に遭遇した日本航空、通称ＪＡＬ。実は二〇一〇年、二兆三千億円の負債を抱えて経営破綻をしたのを記憶している方も多いだろう。その再建に政府が託したのが、当時七十八歳だった稲森和夫だった。マスコミは稲森翁を「航空界に無知であり、高齢では再建は無理。失敗して二次破綻する」と報道した。ＪＡＬ幹部も反発し、冷ややかだった。しかし、稲森翁には確信があった。そして奇跡は起こる。二〇一二年営業利益が二千億円を超えて、ＪＡＬ史上最高の実績をあげたのである。この二年八ヶ月、稲森翁は傷ついた鶴（鶴の翼がＪＡＬのロゴマーク）を復活させたのである。このこともまた、多くの日本人の心に残っているのではなかろうか。この事故が復活前ならば、三七九人全員は助からなかったかもしれないと、私はふと考えてしまったのだった。

この上は、日本を代表する伝統工芸、輪島塗りの復活を神に祈るばかりである。

（令和六年二月五日）